「源氏物語」を読んで

― 現代に通じる男女の情愛と確執 ―

中 楯 健 二

最近、「源氏物語」全巻を通しで読む機会があった。初めて読んだが、これが実に面白い。1000 年以上前の平安時代中期に、紫式部という一人の女性によって、こんな大部の物語が書かれたという事実にまず驚かされる。ドストエフスキーやプルーストにも匹敵する、たぐい稀な才能だと思う。男女の細やかな心理描写には、万人を引きつける魅力がある。源氏物語は、主人公である光源氏の恋愛小説とも言えるし、父（桐壷帝）と自分、それに息子（冷泉帝、夕霧、薫）と孫（匂宮（におうみや））の４代を縦軸にした大河小説とも言える。全 54 帖からなり、1～41 帖までは光源氏に起った出来事が年齢順に語られ、後半は「宇治十帖」と呼ばれる、光源氏亡き後の息子の薫と孫の匂宮を巡る恋愛物語となっている。

現代語訳には与謝野晶子を始め、谷崎潤一郎、田辺聖子、瀬戸内寂聴、円地文子、林望などのものがある。最近では作家の角田和代も現代語訳を出した。私は林望（はやしのぞむ）訳で読んだが、言葉が練れていてとても読みやすかった。海外でもアーサー・ウェーリーの英語版を始め、33 カ国語の翻訳が出ているという。これだけ多くの人によって、現代語や外国語に翻訳されているのは、シェクスピアの戯曲の例はあるが、尋常ならざる魅力があるからに違いない。ある研究者によると、平安時代では和歌と漢詩が第一で、「物語」は文芸の中では格下に見られ、今で言うなら漫画やアニメなどのサブカルチャーみたいなものだったという。しかし、源氏物語の出現によって、物語はそれまでの女、子供の慰み物から、大人が楽しむ娯楽へと変化したと言う。漫画やアニメは手塚治虫が登場して以来、目覚ましい進化を遂げ、世界中で人気を得るようになった。今では「クール ジャパン」の大看板を担う日本文化と認められている。源氏物語も、平安時代におけ

る文学の世界で、それに似たような変革をもたらしたと言う。男尊女卑の平安時代は、セクハラやパワハラ、モラハラなどのあらゆる「ハラ」が充満していた。高位の男性貴族にとっては、優雅な生活を楽しめる社会であったが、女性にとっては我慢や忍従を強いられる厳しい社会であった。今の女性なら、そんな時代に生まれなくてよかったと思うに違いない。私は源氏物語を恋愛小説と言ったが、今の概念ではその表現は適切とは言えない。というのは、恋愛では男女お互いの意志が尊重されてしかるべきであるが、この物語に登場する男女にはそれがない。女性は全く人権を無視され、男性の思うがままに性的関係を強要された。今の言葉で言えば、性的虐待といった表現が正しい。その意味で、源氏物語は恋愛小説とは言えず、仏教用語に由来する「女犯（にょぼん）」の物語と言う方が適切な表現だろうと思う。ただ、私がこう書くと、現代の価値観を一方的に平安時代に当てはめて上から目線で批判するのは、フェアではないとの誹（そし）りを受けるかもしれない。

それではなぜ、そんなひどい内容の話が当時広く読まれたのか。それは紫式部の筆力によるところが大きいが、当時はこのように多くの人が登場する物語はなかった。大体は日記とか「栄華物語」のように、一人の人物（藤原道長）や少数の人物にスポットを当てたものが多かった。それに加えて、読者の女性たちが「セクハラを受けたのは私だけではないのね」、「この正妻の人は気の毒だわ、ご主人が他の女（ひと）に夢中だなんて」といった物語の世界へ感情移入ができ、日常生活の中で抑圧された感情を解き離し慰められるからではないか。なにしろ噂以外に、何も世間の情報が入ってこなかった時代のことだ。没落貴族として辛い思いをしてきたに違いない紫式部は、男の意のままにされる弱い女の立場に怒りを覚え、異議申し立てをしたいと思って書いた節がある。それは、合意のない性的行為に対して、何人かの登場人物に嫌悪感を表明させている。実際に、ヒロインの「紫の上」と「玉鬘（たまかずら）」を介して「嫌なことは嫌だ」と言わせている。これは「源氏物語」の特徴で、男性に対して自己主張をする女性が登場する物語は他にはない。当時の男尊

女卑の社会にあってはかなり先進的な考え方である。源氏物語は当時大変に人気があり、幅広い層に読まれていた。紫式部が仕えていた中宮・彰子は言うまでもなく、一条天皇や藤原道長、藤原公任（ふじわらのきんとう）などの、時の権力者や文化人にも愛読された。特に藤原道長は紫式部に肩入れをして、当時では非常に高価だった原稿用和紙を提供するなどの世話をした。その見返りなのか、紫式部は男女の関係を意味する彼の「召人（めしうど）」になったと言われている。

私は一度源氏物語を原文でも読んでみたいと思っている。解らない言葉だらけでも構わない。現代語訳で読んで頭に入っている筋書きを頼りに読み進めればと思う。注釈も読まない。足りないところは想像力に任せる。「門前の小僧習わぬ経を読む」の諺もある。私は紫式部の書いた文章の鼓動（リズム）が、少しでも感じ取れればいいと考えているので、細かいことにはこだわらない。「いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり……」の書き出しのリズムは現代語訳では決して味わえない。それだけでも、原文を読む価値があると思っている。全てを読むのは出来ない相談なので、私が現代語訳で読んで面白いと思った、例えば「帚木（ははきぎ）」、「賢木（さかき）」「若紫（わかむらさき）」、「須磨」「若菜（わかな）」「夕霧」などの巻から読み進めてみたい。幸いなことに、「源氏物語」は各巻の主要人物ごとに話がほぼ完結しているので、前から続けて読まなければ分からないということはない。どこから読んでも構わないので都合がいい。今後は「源氏物語」翻訳の最高傑作と言われている、アーサー・ウェーリーの英語版にも挑戦してみたいと思っている。余談だが、このウェーリーの英語版から日本語に翻訳し直したものが出ているという。伝言ゲームではないが、どう訳されているのか紫式部の原文と見比べてみると面白いかもしれない。私は本が好きで、これまで手当たり次第に何の脈絡もなくいろいろ読んできたが、ここに来て「源氏物語」という核になる生涯の読書目標ができて喜んでいる。関連本は五万（ごまん）と出ているから、これからが楽しみだ。

紫式部と同じ時期に活躍した女流作家に清少納言がいる。「枕草子」を読めばわかるが、彼女はどちらかと言えば、今でいうところの随筆家(エッセイスト)である。紫式部が人間の心理描写に優れているとすれば、清少納言の才能は自然描写にある。「春はあけぼの、夏は夜、秋は夕暮れ、冬は早朝(つとめて)……」の名文句は誰もが知っている。紫式部と清少納言が仕えた相手は、奇しくも同じ一条天皇の二人の中宮（皇后）であった。紫式部は中宮・彰子に仕え、清少納言は中宮・定子に仕えた。彰子の父は藤原道長、定子の父は藤原道隆で、二人は実の兄弟である。そんなわけで、紫式部と清少納言は、摂政・関白として当時最大の権力を握っていた、藤原家の家庭教師として活躍していたことになる。同じ時期に宮中で活躍していた二人が、相手を意識しないわけはない。お互いにライバル意識を持っていて当然である。清少納言は定子が亡くなると同時に宮中から身を引いたが、紫式部はその 5 年後に宮仕えに出た。そのため二人が直接顔を合わせることはなかったが、紫式部は清少納言について、「彼女ほどしたり顔で、高慢な態度を取る者はいない」と日記に書いているから、清少納言を快く思っていなかったのは確かなようだ。会ったこともない相手になぜそんなことを言うのか。それは二人が仕えていた中宮の父親同士が兄弟でありながら、政治的にはお互いに最大のライバルとして、反目していたことが影響しているからだと言われている。当時は、天皇に気に入られて、娘をお妃として入内(じゅだい)させることが貴族たちの最大の悲願であった。そのため貴族たちは、天皇の目に留まるように競って娘たちに教養をつけようと、文学的才能のある紫式部や清少納言のような家庭教師を付けた。女性の文筆家が当時多く輩出したのには、こうした社会的背景があった。彼女たちの多くは、下級階級の受領(ずりょう)（税を徴収する地方長官）出身の親を持ち、宮廷や上流貴族の家に奉仕する女房（身の回りを世話する使用人）として働いた。こうして、藤原一族は娘を天皇家に嫁がせることによって、代々姻戚関係を築き摂関政治の中枢で権力を掌中に収めた。

この時期には、他に「更級日記」や「蜻蛉日記」、「和泉式部日記」などの、女性による日記や随筆が多く書かれている。そのきっかを作ったのは、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて….」の書き出しで有名な

紀貫之の「土佐日記」である。初めて女性の目で身辺や心情を描いたかな文字による散文だ。この「かな文字」文学の登場は、文才のある女性たちの心に灯をともした。また、平安時代に女流作家が多く活躍した裏には、菅原道真によって遣唐使制度が廃止された影響があると言われている。それまでは文筆といえば男性による漢文であったが、この制度の廃止によってひらがな、かたかなの「かな文字」が生まれた。また、寝殿造の貴族邸宅や衣冠束帯などの装束が登場し、日本独自の「国風文化」が栄えるようになった。それに加えて、暇を持て余す貴族階級の女性の間で、知的好奇心を満足させる読み物への興味が、急速に高まったことも背景にあったという。

主人公の光源氏は、名代(なだい)のプレーボーイという印象が一般的だが、今回「源氏物語」を読んでみて、私の印象は大きく変わった。確かに、彼は恋多き人物である。妻以外にも、何十人という女性と深い関係を持ち、中には子どもまでもうけている。相手は、未婚の女性や人妻、少女、未亡人などと多岐にわたっているが、いったん関係を持った女性に対する光源氏の心配(こころくば)りは驚くほど細やかであった。やさしいと言うのか、包容力があると言うのか、彼は気に入っても気に入らなくても、見初めた女性にはそれぞれ相応の待遇を与えた。当時は高貴な女性でも、父親などの後ろ盾を失うと、みじめな境遇にならざるを得なかったが、光源氏はそうした女性にも手を差し伸べ後ろ盾になった。後に妻になった紫の上もそうした女性であった。

晩年、光源氏は自分が愛した女性たちを、自分の邸宅の一角に居室を構えさせ、こまめに彼女たちを訪れては、和歌や手紙のやり取りをして暮らした。また、元服（男子 14～15 歳の成人式）や裳着(もぎ)（女子 12～14 歳の成人式）、そして誕生日などの時には、盛大な宴を開き祝った。そんな時には、舞いや管弦、謡などが演じられ、身分の高い貴族の子弟たちが、競って己の技能を招待客の前で披露した。それは、こうした技能に秀でることが当時の貴族達にとって、出世や結婚にも関わる重要な関心事であったからだ。光源氏も妻や子ども達に、こうした素養を身に付けさせようと並々ならぬ熱意を示した。こうみると、光源氏を単にプレーボーイと呼ぶわけにはいかな

い。彼は、和歌や笛、管弦（琵琶や琴）の名手であると同時に、知識人、パトロン、教育者としての顔を持つ人物でもあったからだ。その点が、世界に冠たるプレーボーイとして知られた、カサノヴァやドンファン、世之介（好色一代男）などの、女性との官能の喜びにただひたすら生きた享楽主義者とは大きく異なる。

それでは、光源氏の起伏に富んだ人生を辿ってみることにする。光源氏は、天皇桐壷帝の 10 人の皇子の一人として生まれたが、母親が更衣（天皇の寝所に奉仕する女官）という低い身分であったため、皇子の中では光源氏だけが、天皇の臣下（部下）として遇されることになった。天皇は彼を愛したが、彼には強力な後ろ盾がいなかったため、皇子としてはこの先望みがないと考え、努力次第で高い官位が得られる臣下にした。母親の地位が高い皇子のみが、身分を保証され優遇された。源氏名は臣下としては最高の名跡であったが、それは身分社会では敗者を意味していた。そのため、「源氏物語」というタイトル自体が、光源氏の置かれていた社会的地位を示すものであった。光源氏は気品と容姿に恵まれるとともに、和歌や漢詩、管弦にも非凡な才能を示した。そのため、宮中の女房や侍女たちに大変な人気があり、その優雅な身のこなしや教養から発せられるオーラに、彼女たちは胸をときめかせていた。「その美しいことは、男にしておくのがもったいないくらい、いっそ女にして眺めてみたいほどの美形である」と書かれている程だから、彼は大人の魅力を振りまく貴公子然とした人物であったに違いない。匂立つような色気を発散させる坂東玉三郎が、目の前にいると想像すればいいかもしれない。

光源氏が 17 歳の時、陰暦 5 月の入梅時に若い貴公子 4 人が集まり、女性について語り合った。それが有名な「雨夜の品定め」である。そこで光源氏は、3 人の先輩たちから女性の体験談を聞かされる。その一人から「誰からも忘れられた、寂しいあばら屋に、とんでもなく美しく可愛い女がいたりするものだ」という話を聞く。それまで上品で高貴な女性しか知らなかった光源氏は、それがきっかけとなって、言われたような女性に興味を持つよ

うになる。そして、そうした女性との出会いが、それ以降「源氏物語」の主流となって語られることになる。

光源氏にとっての一番の挫折は、兄の「朱雀帝」が愛した女性（朧月夜）と関係を持ったことが露見しそうになり、自ら 26 歳の時に須磨に都落ちをして、1 年間の隠遁生活を余儀なくされたことだ。妻や娘と離れて暮す生活は、光源氏にとって初めてのつらい経験であった。しかし、2 年後にやっと帝の許しを得て都にもどり、政界に復帰することができた。その翌年には、父（桐壷帝）の妃であった藤壺との間に生まれた、不義の子どもが冷泉帝として即位する。そして、それが追い風となって、光源氏は栄耀栄華の道を歩み始める。最終的には、彼は官位としては最高位の太政大臣（だいじょうだいじん）にまで出世することになったが、この 2 年間は光源氏にとって、隠遁から復活へと振幅の激しい期間であった。なにしろ、彼はそれぞれが天皇であった父の妃と、兄の愛人に手を出してしまったのだ。もしそれが分かれば、天皇の逆鱗に触れ打首獄門とは言わずとも、貴族社会から抹殺されてもおかしくなかった。こんな危険を冒したに拘わらず、それが公にならずに済んだのは、幸運としか言いようがない。その意味で、光源氏は強運の星の下に生まれた人物だと言える。

第二の苦難は、出家する兄（朱雀帝）に頼まれて、当時 14 歳の彼の末娘（三の宮）を、光源氏が妻に迎えたことによるものである。これは正妻の「紫の上」にとっては青天の霹靂（へきれき）で、予想すらしていない出来事であった。これによる彼女の苦悩は一通りでなく、激しい嫉妬に苛（さいな）まれた。三の宮が内親王（皇女）に昇格して、格式がますます増していくのを見るにつけ、紫の上は我が身の行く末に不安を感じる。光源氏の寵愛は衰えていくに違いないと危惧し、彼女は出家への気持ちを募らせる。しかし、光源氏は「そのようなことは、断じてあってはならぬことだ。もしそなたが出家して、私と離れ離れになってしまったら、後に残された私は、何の生きている甲斐があろうか」と言って、その申し出を認めようとはしなかった。しかし、ますます出家への気持ちを募らせた紫の上は、ついに心労のため病に倒れてしまう。

心配した光源氏は、彼女の看病に毎日明け暮れることになる。

その一方で、三の宮にも問題が起こる。彼女を秘かに慕う人物（柏木）が現れたのだ。柏木は光源氏の元親友で、後に政敵となる頭中将の息子である。ある日行われた蹴鞠の催しで、御簾の隙間からちらりと見えた三の宮の姿に彼は恋慕する。三の宮は彼を避けるが、柏木はストーカーとなって追いかけ回し、ついには彼女と関係を結び妊娠させてしまう。その子どもが後に、「宇治十帖」の巻で主役の一人になる「薫」である。柏木から送られてきた妻三の宮への手紙を光源氏は偶然目にして、二人の間のただならぬ関係を知ってしまう。しかし、自分にも過去に似たような経験がある。父（桐壷帝）の妃であった藤壺との間に息子（後の冷泉帝）を生んだ不始末があり、その報いではないかと光源氏は大いに狼狽する。自分の過去と符合する出来事に、彼は人生の皮肉を感じる。相手の柏木は、自分がその琴や笛の才能を認めて、目にかけてきた人物であっただけに、光源氏にとっては裏切られたという気持ちが強く、大きなショックであった。「さてもさても、この三の宮をこれからどのように遇したら良いのであろうか。こんな不義のことを知ってしまった今となっても、今までと同じ妻としてもてなさなくてはならぬのか」と光源氏は思い悩む。しかし、プライドと世間体への思いから、彼はこの秘密を守り通そうと決意する。そこで、彼は表立って怒りを顕わにすることを避け、不義の子「薫」を自分の子どものように遇した。一方、光源氏に秘密が漏れてしまったことに気づいた柏木は、恐怖の余り病を発して間もなく亡くなってしまう。柏木と光源氏の間で板挟みになった三の宮は、思い悩んだ末に出家してしまう。この個所は、男女の三角関係の因縁を物語る部分である。加害者（柏木）の恐怖と被害者（光源氏）の苦悩が、それぞれの立場から余すところなく描写されている。

その後何年か経って、もう一つの三角関係が勃発する。それは、親友の柏木から後事を託された夕霧（光源氏の息子）が、柏木の妻女の二の宮（三の宮の姉）を見舞う内に、彼女に惹かれるようになってしまう。しかし、会うたびに夕霧が思いのたけを伝えても、彼女はなかなかなびかない。気持

ちは焦るものの相手はなにしろ先帝の娘だ、失礼な扱いはできない。そこである日、意を決して「どうか世に比類ないほどの、私の好意を受け入れてください。私は貴方の許しがない限りは、これ以上のことはさらさら致すつもりはありません」と相手の立場を尊重しながら熱心に口説く。この振る舞いは、セクハラのために # MeToo で訴えられる、現代の男性よりもはるかに紳士的である。それでもやがて思いは実り、夕霧は二の宮を自分の愛人（妾）にしてしまう。ところが、本妻（雲居(くもい)の雁(かり)）は旦那の行動が許せず、嫉妬のあまり実家に帰ってしまい、二人の関係は修復が出来ないまでに悪化してしまう。自分をないがしろにして、愛する女性の所に通い続ける旦那の様子を見るにつけ、妻は大いに嫉妬する。そして、旦那がこっそり愛人に渡そうと書いた手紙を偶然目にして、彼女はそれを目の届かないところに隠してしまう。それは愛人にすぐにでも渡さなければならない手紙であったため、旦那は必死になってあの手この手で、隠し場所を妻から聞き出そうとする。しかし、彼女はそれを冷たくあしらって、知らん顔でやり過ごす。この場面での旦那と妻との駆け引きが実に面白い。妻の気持ちをなだめすかそうとする夫と、それを拒絶する妻の心情が見事に描かれている。昔も今も男女間の気持ちの行き違いには、共通するものがあるなと思わせるくだりである。

光源氏も晩年を迎える頃になると、身のまわりの伯父や叔母が次々と出家していく。光源氏も 50 歳前後になると、体力や気力に限界を感じ始め、この世のはかなさを考えるようになる。そして出家への憧れを持ち始める。51 歳の時に愛妻の紫の上を亡くしたことで、その気持ちはますます強くなる。気持ちが落ち込み、何日も人に会わず孤独の影を濃くしていく。心に浮かぶのはいつも紫の上のことばかり。自分が一番に愛したのは、紫の上であったと自覚するようになる。昔の恋人との恋文も、須磨での蟄居時代に愛妻から受け取った手紙も、心を迷わせると考えて全て破り捨ててしまう。そして出家の準備をする。寂しさのあまり恋人の部屋をしばしば訪れるが、「閨(ねや)」を共にすることはない。そして、光源氏が六条院の邸宅で、52 歳を過ぎたころに亡くなることが「幻」の巻で暗示される。当時の平均寿命が 30 歳前後であったことを考えると、50 歳を過ぎるまで生きたのは、かなり長生

きの部類に属することだと言える。この「幻」の巻で光源氏を中心にした「本編」は終わる。

そして光源氏の死後、新しい世代の恋愛物語が、息子の「薫」と孫の「匂宮」を中心に語られる。それが「宇治十帖」である。基調をなすのは、宇治を舞台に息子と孫が、浮舟という一人の美女を巡って、三角関係に陥って行く物語である。この三角関係に悩んだ浮舟は「はたして、本当に自分は二人に愛されているのだろうか」と疑問を持ち始め、苦悩の末に死を選んでしまう。これは本編で、柏木と夕霧が人妻と繰り広げた三角関係のリフレイン（反復）といえる。光源氏の DNA が若い世代の二人に引き継がれ、男女の色恋物語が飽きることなく展開されていく。宇治十帖は本編より面白いと言う人がかなりいる。そのことからも、紫式部の筆力は後半になっても衰え知らずだということが分かる。

以上が私の読後感である。名前は知っていても、「源氏物語」は難しくて読んでも解らないと思い込んでいる人は多いに違いない。難しいのは確かだが、それは古い物語が古い言葉で書かれているからではない。その主な理由は、登場人物の呼び方が一定していないところにある。人物が住んでいる場所や、身分、役職、あだ名などで、その都度いろいろに呼ばれる。光源氏の最初の恋人の六条御息所の名前は、彼女の住んでいた場所に由来する。また、三位とか四位といった身分や右大臣、左大臣、太政大臣といった役職名で呼ばれることも多い。そのため同一人物でも、出世するごとに呼び名が変わるため、注意していないと誰が誰だか分からなくなってしまう。例えば、光源氏は「中将の君、大将の君、大臣の君、大殿」などと変化していき、光源氏のあだ名がなければ、同一人物だとは特定できない。上記の文中に出てくる柏木も別名は「衛門の督」と呼ばれ、夕霧は「大将の君」と呼ばれている。また、春より秋を好んだから「秋好中宮」、暗闇で蛍を飛ばして顔を見たから「蛍の宮」、鼻が紅いところから紅花を意味する「末摘花」、ヒゲが濃く色が黒いから「髭黒の大将」とか、思い付きとしか思えないようなあだ名で呼ばれる人物も登場する。彼等も身分や役職名で呼ばれることもあり、違った人物が登場したのでは

ないかと勘違いして、話の筋が読みとれなくなってしまうことがある。これは「源氏物語」にだけに見られる大きな特徴である。

「源氏物語」は、これまで見てきたように平安貴族の恋愛を巡る男女の心の機微を巡る物語である。そこには、「喜び、悲しみ、情愛、憎悪、嫉妬、恨み、失意」などの、さまざまな感情に揺れ動く平安人(びと)の姿が、源氏物語絵巻そのままに色鮮やかに描かれている。その時代ならではの人の思いと、今に通じる人の思いが、互いに響き合って読む者の心を打つ。1000 年前の世界にタイムスリップして、我々を不思議の国「平安ワンダーランド」に誘(いざな)ってくれたことに対して、紫式部への感謝の気持が自然と湧いてくる。

参考資料

平安時代とはどんな時代だったのか

これだけ面白い「源氏物語」を読めば、その背景となっている平安時代が、どんな時代であったか知りたくなる。そこで、私は色々な資料を基に、その社会や風俗、習慣、制度、生活などを分かり易く下記に纏めてみた。

◇貴族たちの恋愛

恋愛のきっかけとなるのは、主に女房（主人の身の回りを世話する女性）達の噂話だ。「どこそこに美人の姫君がいる。琴の上手な女君がいる」と言ったような話に心を動かされた男性は、彼女への思いを詠んだ和歌や懸想文(けそうぶみ)（恋文）を女房に託す。それを女房や母親がチェックして女性に渡す。そして、彼女が会ってみたいと言えば、男は部屋に上がることを許され、御簾などを隔てた物越しに彼女との対面ができることになる。女性のかすかな衣擦れの音や、声などが聞こえると男の気持ちは高ぶる。そして男は頃合いをみて、御簾の下から彼女の手を握り体を引き寄せて、寝所に入って契り

を結ぶ。ちなみに、結婚相手として最も重要視されたのは、身分や家柄、出世の見通しだった。男性が出世して将来的に後ろ盾になってもらえれば、親にとっても自分の家の繁栄に繋がる。また、当時は、新婚家庭の経済は妻方が担っていたので、彼の家柄がよければその負担からも逃れられる。

一方、噂に頼らず男が自分自身で、相手の女性を探す場合もある。外に出掛けた時に通りがかった家で、若い女性がいる気配を感じると、男はその家の前で牛車を降り、従者に和歌を届けさせる。どうしてそれが分かるのか、それは家の造りや、庭の佇まい、生垣の手入れなどで、婚活をする男の嗅覚が働くからだとしか言いようがない。そして、相手から返歌をもらい、お互いに気に入れば、男が女の家を後日訪れることになる。光源氏もこうして何人かの女性と知り合った。

◇「夜這い」の習慣

平安時代の結婚は、夜這いが一般的だった。これは一般庶民だけでなく、貴族の間でも普通のことであった。しかし、現在の夜這いとは少し意味が違う。当時はそれ自体がプロポーズを意味していた。だから、同じ男性からの夜這いが 3 回続き、お互いに文句がなければ、餅を食べて結婚となった。餅を食べるのが結婚の儀式だった。また、結婚するまでは複数の人間と関係を持つことが多く、女性が妊娠すると結婚するというのが一般的であった。今で言う「できちゃった婚」である。庶民の家では、忍んできた男が娘と夜這いをしても、近くで寝ている両親は干渉せず、寝た振りをしていることが多かった。貧しかった庶民たちは、娘が早く結婚してくれれば、食い扶持が一人分減って助かると思っていた。

◇男女の逢瀬

貴族階級の逢瀬は、女の家で行うものと決まっていた。彼とどこかで落ち合うとか、彼の家に行くとかではなくて、恋をすれば女は待たなければならない。男尊女卑の時代、女性はいつも受身の立場であった。使いが彼の文（手紙）を持ってくるのを待ち、彼が訪れるのを待つ。ひたすら家で待

つ、それが平安時代の貴族女性の恋の基本的な形だった。男女が逢瀬を楽しむのは、夜になってからである。男は夕方の薄暗くなる頃に牛車で相手の女の家へ出掛け、夜が明け切らないうちに相手と後朝(きぬぎぬ)の別れをする。当時はまだ掛け布団はなく、お互いの衣と衣を重ねて一夜を共にするのが一般的だった。そして、朝になってその衣をお互いに身につけて別れる。そこから衣衣(きぬぎぬ)との掛け言葉で後朝(きぬぎぬ)の別れと言った。当時は蝋燭や紙蝋の世界であったため、親しくなってもお互いの顔を見ることはできなかった。そのため、手探りの触角や声や息遣いの聴覚、香りを感じ取る嗅覚が、相手を知る唯一の方法であった。後朝(きぬぎぬ)の別れの後は、女は男からの返事をただひたすら待つほかなかった。別れたその日のうちに、男から愛を確かめる和歌や文が送られてこなければ、気に入られなかったと悲観して命を断つ女性もいた。

◇「妻訪婚(つまどいこん)」の風習

一夫多妻制であった当時、貴族の間では「妻訪婚」と呼ばれる、夫が妻を訪ねる通い婚の風習があった。正妻は邸内に住むことを許されていたが、通い婚の相手は、正妻以外の女性たちであった。妾とされていた女性たちは、基本的に自分の家から出ることはなかった。彼女たちは同居が許されないばかりか、夫に会える日も占いによって決められていた。

◇天皇の結婚

平安時代の天皇の結婚は、欲望を満たすのが目的ではなく、確実に後継ぎを残すことだった。一夫多妻制はそのための制度であった。20～30人ものお妃がいる天皇もいたが、子沢山だけでは天皇としては失格であった。後継ぎは次代の天皇になる存在であるため、相手は誰でもいいと言うわけにはいかなかった。貴族の中でも強力な後ろ盾を持つ女性が優先された。それは、即位した後に貴族たちの協力が得やすく、円滑に政治を行うことが出来るからだ。

◇皇子と臣下

皇子は①東宮（皇太子）②皇太子要員 ③源氏 の 3 種類に分類され

ていた。皇族は国家から支給を受けて生活をしていたので、皇族が増え続けると国の財政が圧迫される。そのため、天皇の血を引いていても、皇族から引き離され臣下扱いにされる皇子もいた。臣下になると、国からの支援はなく、自ら生計を立てる必要があった。光源氏の場合がそれである。母親の身分が低く、後ろ盾もいなかったことで、彼は臣下にされてしまったが、実力で官位では最高の太政大臣にまで昇りつめた。

◇人材登用制度

中国では科挙の制度によって有能な人材を選抜したが、日本は科挙の制度を採り入れなかった。日本では「蔭位の制」という、親の七光りとも言えるような制度を敷いていた。貴族の親を持つ子どもが、親の位に応じて優遇される制度である。学力より血筋が大事というのが、当時の考え方であった。日本の朝廷にも人材登用のための制度はあった。それが大学である。そこで最も人気があった科目は、中国の歴史と文学を学ぶ「文章道」であった。朝廷の文書はすべて漢文で記されており、漢学が官人にとって必須の知識だったからである。だが高位の貴族の子どもは、勉学に励まずとも親の縁故で出世できたため、大学で学ぶのはコネのない貧乏人ばかりとなった。

◇子供の養育

平安時代は、高貴な女性は自らは子育てをしなかった。乳母を雇って、彼女に授乳や着替えや添い寝をさせ、大きくなればその子の躾や教育に当たらせた。乳母は数人雇われることも多かった。乳母は女主人に寄り添い仕えていたので、時には彼女の秘密を知ってしまうこともあった。藤壺と光源氏の不義も乳母に知られてしまっていた。

◇貴族の住い

貴族の家は寝殿造と呼ばれ、母屋（寝殿）と幾つかの別館（対）が渡り廊下でつながり、池や自然の風景を模した庭園を持つ屋敷であった。そこには 20 人から 30 人程度の貴族が住んでいた。母屋には主人と正妻、別館には子供や側室が住むのが普通であった。ホテルの大宴会場みたいな広い空

間に、御簾や障子などの間仕切りをし、主人も女房たちも暮らしていた。そのため、隣室の男女の会話や捨てられた手紙などから情報が漏れ、いろいろな噂話が女房達を介して広められた。そんなことから、貴人や女主人たちは女房たちに気を許すことが出来なかった。寝殿造は強固なようでいて、秘密を守るには不向きな作りになっていた。世間を気にする平安貴族の感覚は、こうした環境から来ていると言える。優雅に見えても、貴族たちは実際には緊張を強いられる生活を送っていたのだ。一方、庶民といえば、地面を掘って柱を組み、その上に屋根を付ける竪穴式住居に住んでいた。これは縄文時代から続く建築工法である。

◇美人の基準

高い位の貴族達は、お互いの姿を見ることはできなかった。いつも御簾（みす）の後ろにいて顔は見えない。特に高貴な女性は、親兄弟や夫などの特定の人にしか、顔を見せることは許されなかった。それは、女性が人前に姿を現すのは無作法とされていたからだ。そのため、御簾越しでしか人とは会話することはできなかった。外見はシルエットしか分からないため、顔や容姿はあまり問題にされなかった。その代わりに黒髪が重要視された。ツヤのあるしっとりした長い黒髪が美人の絶対条件だった。それが見事だと、あそこの姫は絶世の美人だと噂された。当時の女性は、着物を何枚も重ね着していたため、薄着の今の女性と違って、身体の線は全く分からなかった。そのため、男性は話し声や話し方、着物に付けたお香の匂などで、自分好みの女性を探さなければならなかった。ちなみに、当時の男性が好んだのは、ふくよかな女性だったという。

◇貴族の一日

当時の日記から、貴人達が日々どのように過ごしていたかが分かる。彼らの一日は早かった。午前 3 時に起床すると、自分の生まれた年の星の名前を 7 度唱え、前の日の出来事を日記（＊）に付けた後、暦でその日の吉凶をチェックした。それから楊枝で歯を掃除し、粥を食べ、髪を梳き、手足の爪を切り、5 日に 1 度程度は身を清めるために沐浴をした。それから、午前

7時頃に出勤して正午頃まで働いた。手当は付くものの、夜勤や宿直も日常的にあった。有名な「雨世の品定め」が行われたのも宿直の日であった。公的な仏事、儀式、重要会議などは、しょっちゅう夜に催されていた。貴族は、今で言う国家公務員だったので、彼らにとって最も重要な仕事は、神社やお寺に関する宗教的なイベントであった。それは農耕と深く関わっているため、国家が盛大に行うべき公式行事として重要視されていた。これらの行事を順調に執り行うことが、平安貴族にとって極めて大事な仕事だった。平安時代はのんびりした時代のように思われがちだが、実は厳しい時代であった。出勤や勤務状態を管理するシステムも存在していた。仕事が終わった後は自由な時間であったが、彼らはただのんびり過ごしていたわけではない。彼らにとってそれは大事な時間であった。特に若い貴族たちは、それを和歌や管弦、蹴鞠などの素養を身につけるための時間に当てた。これらに秀でることが、出世に深く関係していたからだ。

＊当時の貴族たちは、公務や儀式の次第を子々孫々にわたる知的共有財産として遺すために、日記を付ける習慣があった。

◇服装とお洒落センス

貴族の服装は、男性は衣冠・束帯、女性は十二単であった。男性が宮中に出る時の正装は、昼は束帯、夜は衣冠であった。普段着は直衣（のうし）と狩衣（かりぎぬ）である。束帯は宮中での勤務服として使われていたが、締め付ける部分があるため、一日中着ているのは窮屈なため、それを少し改良したものが衣冠である。直衣は衣冠とほとんど変わらないが、多少くつろげる感じがある。オフィスカジュアルといった感じだ。狩衣はその名の通り、狩をする時の服で貴族の普段着である。現代では神職が日常的に着ている。平安時代の貴族は、昼頃に仕事を終え、午後は付き合いのある者同士が、お互いの家に招いたり、招かれたりすることが多かった。そんな時には、着る人の服装センスが問われた。特に女性にアプローチする時は、色とか模様、色の取り合わせなどでセンスの良し悪しが判断されるため、男性は大変気を使った。女性は十二単だが、いつもこんな厚着でいたわけではない。気候に合わせて5枚から7枚

ぐらいに調節していた。男性の前に顔を出す習慣のなかった高貴な女性達は、御簾の下から見える袖口の色合わせに気を使った。一方、庶民は多くが直垂（ひたたれ）という上下が別かれている服を着ていた。

◇食べ物と調理法

現代とは違い、1 日の食事は 2 回だけだった。貴族は普通に白米や唐から伝わった麦から作った麺類を食べていた。肉食は仏教の影響で禁じられていた。また、食にこだわることは、欲につながるため好ましくないという価値観があった。果物は、栗、梨、ヤマモモ、アケビ、木苺などが食べられていた。当時の貴族の食事は、醤油も砂糖もなかったため、かなり単調なものであった。京都は海から遠いため、魚介類はほとんど塩漬けや干物にした。カブや大根など、京の近郊でとれる野菜は漬物にした。調理の仕方はいたってシンプルで、蒸す、煮る、焼くなどの方法しか存在せず、炒めたり揚げたりすることはなかった。庶民が食べていたものは、ヒエ、アワなどの雑穀で、それをお粥のような状態にして食べていたが、腹いっぱい食べられることはなかった。そこで、栄養を補うために彼らは、アユやフナ、貝などの川のものや、山鳥やイノシシといった山のものも食べていた。魚や肉は生で食べるか簡単に焼くくらいであった。庶民の間では料理と言う考えはなく、保存のきく干物や漬物が重宝されていた。

◇入浴の習慣

当時は、今のように湯を沸かして入る風呂がなかった。そのため、貴族には湯船につかるという習慣はなく、かなり身体は不衛生であった。特に女性は沢山の着物を着込んでいるうえ、化粧もしていたので身体が垢まみれで、白い粉（垢）が衣類に付着することもあった。そのため、体臭をごまかす目的でお香が文化として根付いていた。フランスで香水が普及したのと同じ理由だ。なぜ貴族たちは入浴を嫌ったのか。それは占いによる吉兆を決める風習が関係していた。縁起が悪い日に入浴し垢を落とすと、「毛穴に邪気が入る」と信じられ、体調を崩したり命の危険もあると考えられていた。身体を洗う機会は「禊（みそぎ）」の水浴がメインであった。しかし、これは神仏へ

祈りを捧げる際のお清めの儀式で、入浴とは目的が違っていた。吉日にしか風呂に入らないため、入浴は月に 4～5 回程度であった。その頃に愛用されていたのは、蒸気風呂で今で言うサウナであった。庶民たちは蒸し風呂に入って汗を流し、垢を木の葉などで落としていた。貴族の屋敷内にあった蒸気風呂は「風呂殿」と呼ばれていた。お湯を沸かし、専用の密室内に湯気を入れ、蒸気が満ちてから入浴する。入浴中は尻の下に布を敷き、入浴後は身体をお湯で流すだけで、身体を洗う習慣はなかった。蒸し風呂は「枕草子」に出てくると言うから、平安時代の人々にはかなり浸透していたと思われる。

◇離婚の条件

平安時代は、結婚は女性が 13 歳、男性が 15 歳からできることが法律で決まっていた。結婚は男からの夜這いが 3 日続き、男女共に合意すれば、最短三日というスピードで成立した。また、離婚に対する法律もあった。結婚は簡単であったが、離婚は法に照らして判断される必要があった。その法律は「七三不去（ななさんふきょ）」と呼ばれ、離婚するための 7 つの条件を次のように規定していた。

(1) 妻に子が生まれない場合（特に男の子が生まれない場合）
(2) 妻が浮気をした場合
(3) 妻が舅（しゅうと）、姑（しゅうとめ）に仕えない場合
(4) 妻の口数が多すぎる場合
(5) 妻に盗癖がある場合
(6) 妻の嫉妬心が激しい場合
(7) 妻に悪い病気がある場合

このうち一つでも該当するものがあれば、夫は妻に離婚を言い渡すことができた。しかし、夫に非があっても、妻からは離婚を申し出ることはできなかった。

◇文章表現力

男女とも和歌を詠んだり、文章を書いたりする能力がなければ、異性にはモテなかった。特に男性は文才がなれば、女性から返事すらもらえなかった。女性も男性の心をつなぎ止めるために、返事を出す時には女性らしさを感じさせようと、花を添えたり、紙を選んだり、香を付けたりと工夫を凝らした。和歌のやり取りでは、三十一文字という短い言葉の中で、相手に対する切々たる思いを表現することが必要になる。女性の顔を見ることが出来なかった当時にあっては、男性は自分の魅力を最大限に発揮するために、和歌や手紙で高い知性を示す必要があった。それが女性の心を射止める最善の手段であることから、男性には表現技術を磨く努力が求められた。

◇化粧と髪の手入れ

平安時代の化粧は、笑うと崩れてしまうほどの厚化粧であった。そのため、彼女らは扇で顔を隠したり、笑わない努力をしていた。そんな時に、明石家さんまのような男性に話しかけられたら最悪だ。ひび割れた鏡餅のように、化粧は地崩れして台無しになってしまう。そうなると、歌舞伎役者のように下地から塗り直さなければならない。今の若い女性が電車の中で化粧をするようなわけにはいかない。時間はかかるし根気も必要になる。また、女性は眉毛も全部抜き、眉を書いていた。当時は黒く艶のある長い髪が、美人の条件とされていたため、髪の手入れに女性は特に熱心であった。色濃く艶を出すため、彼女たちは米のとぎ汁を使って、髪全体を濡らして櫛でとかしていた。その後で、香木を焚いて髪に香り付けをしていた。ヘアケアには特段の努力をしていたことが分かる。

◇トイレ文化

トイレは衛生的ではなかった。貴族は樋箱（ひばこ）と呼ばれる木製の箱に用を足していた。樋箱とは現代の「おまる」に相当するものである。「すだれ」や「屏風」で仕切られた一畳程度の所に設けられ、排泄物が溜まると下働きの男が川までそれを捨てに行った。家中に尿や便の臭いがするため、それを消すため香が焚かれた。当時の位の高い女性たちは、丈の長い着物を何枚も重ね

て着ていたので、一人で用を足すのは容易ではなかった。そのため、世話係の侍女がトイレに同行した。周りの人の手助けが必要だったため、トイレでの個人情報は守られなかった。紫式部が仕えていた中宮・彰子が第一子をもうけた時も、トイレのことから生理が止まったことが分かり、懐妊の事実が女房からの報告で、父親である藤原道長の知るところとなった。一方、庶民は道端で用を足し、高下駄を履いて裾の周りを汚さないようにしていた。紙はなかったため、柔らかな木のヘラで後始末をした。平安時代の後期には、穴を掘って用を足す「汲み取り式便所」が登場する。設置も簡単だったため、日本ではその後数百年にわたり、この汲み取り式の便所が主流となった。

◇占いと生活

平安時代は占が全てを決めていた。占いは貴族から庶民に至るまで、人々の生活の細部にまで入り込み、ごく日常的に行われていた。天皇はじめ貴族たちの生活は、すべて吉凶によって振り回されていたと言っても過言ではない。旅行も、出歩く方角も、食べる物も、入浴も、全て占いによって規制されていた。その占とは、中国から入ってきた陰陽道のことで、陰・陽と五行（木・火・土・金・水）の作用から全てを占っていた。政府機関の中に陰陽寮が置かれていて、そこで吉凶を判断していた。この占いには、タブーや物忌みが多く、人の行動をがんじがらめに縛るものであった。朝一番にその日の星占いをし、次に暦と鏡に映った自分の顔をチェックして、その日一日の吉兆を判断した。しかし、占いを理由に休んでも、職場で怒られることはなかった。女性の家に通うのも占いで決めていた。このように、祈祷や占いは生活の一部であった。

◇家柄と後ろ盾

平安時代の恋愛では、個人の魅力だけでなく家柄が重要視された。男女とも天皇家の血筋が入っていれば、それだけで異性に大変モテた。女性の場合、父や祖父がそれなりに高い役職についていたり、格式ある家柄の出身であれば、男性から引く手あまたのアプローチがあった。家柄の優劣は、恋愛において大きなポイントとなった。天皇家に近く官位が高い家柄の女性

は、正妻として迎え入れられると、それなりの地位を得ることが出来た。貴族一門として家柄が良い娘であっても、父親が亡くなり後ろ盾がいなくなると、境遇は一変し女房として働かなければならなかった。これは彼女にとって大変な屈辱であった。しかし、こうした良家の女性は、女房として貴族から引く手あまたであった。それは、こうした出自の女性を雇えば、貴族としてのステータスが上がるからだ。光源氏の場合も、母親の身分が低く、後ろ盾となる祖父母もいなかったため、皇子としての待遇は得られず、臣下扱いになってしまった。

◇穢れの思想

女性は生理になると、血が不浄とみなされ神事に関わることを禁じられた。それは穢れと考えられていた。当時の社会では、死体や血液を特殊な不浄とみて忌み嫌う思想があった。穢れはそれに触れると忌わしさが伝染すると考えられていた。穢れの代表的なものは人と動物の死だった。出産は血を伴い、しばしば子供や産婦が死ぬことがあったため、妊婦は穢れた身とされた。天皇の妃も懐妊すると、里に帰らなくてはならなかった。出産の準備というよりも、内裏を清浄に保つためである。多くは妊娠 3 カ月で内裏を出るのが普通だった。物忌みも穢れから身を守るための方策だった。これは、陰陽道による災い防止のために、外との交渉を断って 2 日間家に引き籠った。「物忌み」と書いた紙や木札を屋敷の門前に掲げて、身を慎んでいることを外部に知らせた。占いはご当人しか分からないため、それはしばしばやりたくない嫌なことを断る口実に使われた。

◇娯楽と遊び

男は体を動かすことが意外に好きだった。男の遊びには、小弓（こゆみ）、蹴鞠（けまり）、独楽（こま）、石投（いしなご）、竹馬などがあった。「小弓」は小さな弓矢で的に当てる室内ゲームで、蹴鞠は相手が蹴りやすいように、次々と毬を渡し、相手が蹴り損なうと渡し方が悪いとされた。競技ではなく、職場で行われる昼休みのバレーボールみたいなものだった。「独楽」は今に伝わる遊びだが、朝鮮半島の高麗（こま）から伝わったので「こま」と呼ばれるようになった。「石投」は石

を数個下に置き、一つを高く放り上げて、それが落ちてこないうちに置いた石を拾って、落下してきた石を受ける遊びだ。「竹馬」は今の竹馬と違って、笹竹の枝にまたがって騎馬ごっこをするもの。このほか、砂に自然風景を描くジオラマ遊びのようなものもあった。一方、女性の娯楽は、囲碁、雛遊び、貝合わせ、絵合わせなど、あまり体を動かさないものであった。娯楽の少ない時代のこと、遊びをしながら男性の噂話をする女性の様子が源氏物語の中にも出てくる。女性の一番のストレス解消は、今も昔もおしゃべりだということが分かる。また、ペットを飼うのも貴族の間では人気があった。当時、すでに猫も犬も飼われていた。猫は中国から輸入される貴重な存在だったが、犬は雑食性で人間の食べ残しやごみを食べるので、自然に飼われるようになった。また、小鳥も飼われていて、愛鳥を持ち寄り、美しさや鳴き声を競う「小鳥合(ことりあわせ)」という遊びもあった。

◇末法思想

当時は、釈迦がいなくなって2000年が経つと、人々に信仰が薄れ世の中が乱れるという、末法思想が信じられていた。その2000年が平安時代に当たっていた。末法の世にはどんなに努力しても、誰も悟りを得ることができない。国が衰え人々の心も荒み、現世での幸福も期待できない。こうした状況から、人々の間にひたすら来世の幸せを願う浄土信仰が流行した。その教えは現世よりも来世を重んじる。この世を穢れの世界とし、死んで浄土に生まれ変わることを願う。そのため、阿弥陀仏に人々はすがり、多くの阿弥陀堂が建てられた。貴族達も極楽浄土に迎えられることを願って、来迎図などを盛んに描かせた。宇治の地に建立された平等院の鳳凰堂の姿形は、正に極楽の阿弥陀仏の宮殿を模したものである。当時は出家して仏道に入る人も多かったが、若い身空での出家は、俗人としての身を殺すに等しく、一般には無念と思われた。

◇物(もの)の怪(け)の世界

平安時代には、生霊や鬼といった概念が存在していた。それが物の怪と言われるもので、当時のいろいろな物語の中に登場した。民間信仰では、

人間に取り憑いて苦しめたり、病気にさせたり、死に至らせたりするという、怨霊、死霊、生霊などが存在すると考えられていた。健康な時には取り憑かないが、精神や身体が疲れている時とか、お産の時などに取り憑かれることが多い。源氏物語にも物の怪の話が沢山でてくる。光源氏の最初の恋人「六条御息所（ろくじょうのみやすんどころ）」にまつわる話が有名だ。彼女は光源氏を深く愛していたため、その愛を独占したい気持から、彼の周りの女性達に怨霊となって取り憑いた。よく知られているのは、光源氏の正妻「葵の上」にまつわる話だ。葵祭りで牛車の場所争いで、葵の上から屈辱的な仕打ちを受けたのを恨みに思い、彼女が懐妊した時に生霊となって取り憑き、出産後に彼女を取り殺してしまう。更に、六条御息所は死後も死霊となって、光源氏の妻である「紫の上」と「三の宮」にも取り憑いた。これを見て、娘（秋好中宮（あきこのむちゅうぐう））は、母がまだ成仏できていないのだと考え、供養をして霊を慰めた。

当時、原因不明の病は物の怪によるものとされ、僧侶の加持祈祷によって、物の怪を「よりまし」と呼ばれる少女に移した。移すと「物の怪」はトランス状態になり、泣いたりわめいたりして、自分の正体を明かし取り憑いた理由と立ち去る条件を告げる。その要求を聞き、祈祷師がまじないをすると物の怪は退散する。「よりまし」になった少女も加持祈祷によって正気に戻る。これが目に見えない霊的なものに対する当時の人の治療法であった。

以上が平安時代の社会的背景だが、これを読むと平安貴族の生活観や恋愛観、美意識、宗教観などが分かり、源氏物語をより深く理解することが出来る。しかし、この物語に登場するのは貴族階級のみで、一般庶民は出てこない。その後も長い間、庶民が物語の中で語られることはなかった。彼らが物語の主役として躍り出るためには江戸時代を待たなければならなかった。町人が一気に力を得て消費文化が栄えた元禄期になって初めて、庶民たちにも生活を楽しむ機会が増えた。仮名草子や浮世草子などの娯楽本が出版されるようになり、数多くの戯作者が誕生した。そして、その中から井原西鶴や近松門左衛門などの花形作家が登場することになる。こうして、江戸期

の文学が隆盛を極めることになるが、これは決して突然に花開いたわけではない。そこには、源氏物語を源流とする物語の精神が地下水となって、そこに至るまで脈々と流れていたことを我々は知らなければならない。